場所　大分県中津市

面積　0.9ha



活動目的

カブトガニなどの希少種が多数生息する自然度の高い環境を未来にそのままの形で将来につないでいくこと。それによって、過去、現在の人々が享受してきた生態系サービスを未来の人々も受け取れるようにすること。自然の力を活かした防災減災の維持も視野に入れている。

サイト概要

大分県中津土木事務所が所有・所管する河口湿地。瀬戸内海最大の中津干潟中央部にある大新田海岸の最東端に位置する。北から南に砂泥質干潟、砂浜、海浜性植物群落、塩性湿地、陸域とつながる自然海岸である。東側に舞手川が流れ、淡水、汽水、干潟の生物群が生活しており個体数、多様度、希少度ともに高い。カブトガニ、ハヤブサなどの他多数の希少種が溢れる。生物調査は、生物・環境系学会所属の研究者、大学教員などが比較的高い頻度で行っている。活動団体の水辺に遊ぶ会は1999年の発足当初から候補地の調査、保全活動、自然観察会などを実施している。申請地を起点に中津干潟全体に共生サイトを広げたい。

土地利用の変遷

田尻地区の歴史は古く、万葉集に歌が残る加茂神社が隣地にある。西側に広がる大新田地区は、干潟であった土地を江戸時代に干拓して田をつくったことからこの名称となった。申請地は近世、近代には付近に塩田が開かれたこともあった。近年は自然の力を活かした防災減災（Eco-DRR）インフラであるセットバック護岸が設置され、砂浜のバッファー機能を活かし、護岸を陸地側に下げて自然環境の保全と人々の安心安全を両立させている。北側に広がる砂浜では、アカテガニ産卵観察会の開催を通して保全についての学びを行っている。

サイト周辺の環境

東西約10㎞の海岸線を持つ中津干潟の中央に位置するのが、幅約1.5㎞の大新田海岸である。沖合の3㎞近く自由に歩くことができる砂泥質の干潟が広がる。一帯には塩性湿地、水田、松林、雑木林などが広がっている。近年、後背地の開発が進み保全の必要性が高まっている。また、大規模なソーラー発電所ができて、気候変動対策と生物多様性保全のコンフリクトの最前線ともなっている。

アピールポイント

人々の安心・安全と自然環境の保全を両立した、セットバック護岸の海側にあるこの地には、高い生物多様性を持ち、希少種も種数、個体数ともに非常に多く生息している。現在、このような自然の土地利用はEco-DRRとかグリーンインフラと呼ばれるが、これは1999年に、市民や研究者、行政等が１年をかけて考え合意して着工したものである。防災か保全かの二項対立を越えて、両立を目指した点について評価が高い。

生物多様性の価値

価値（１）公的機関等によって、生物多様性保全上の重要性が既に認められている場

【選定されている制度名】

重要里地里山
重要湿地
重要海域

【選定理由や内容】

●重要里地里山
中津市と宇佐市の2市に広がる潮の干満差の大きい海浜と、後背地に広がる松林、農耕地、塩田跡などを含む地域である。多様な生態系が残されていることから、多くの野鳥の生息地・越冬地となっており、シギ・チドリ類のほか、冬季にはカモ類の飛来も確認されている。また、宇佐海岸では周辺の干拓地が採食地となり、ツル科の鳥類の飛来・越冬がみられる。松林再生やビーチクリーンアップ活動による自然とのふれあいの場づくりに取り組んでいる。飛来する野鳥や当該地に生育する植物などの観察会等による市民への環境教育の推進を図っている。「NPO法人水辺に遊ぶ会」は、ボランティアを募って、中津市大新田海岸の海岸清掃、荒廃した松林の整備（不要樹木の伐採・抜根、枝打ち、下刈り等）を実施している。
●重要湿地
シギ・チドリ類の越冬、春秋の渡りの場として重要（重要野鳥生息地（IBA）選定）。希少な魚類やカブトガニ、クロヘナタリ、シマヘナタリ、オカミミガイ、センベイアワモチ等希少な底生生物が多数生息。
●重要海域
沿岸域　周防灘南部の一部。シギ・チドリ類、ヨシガモなどの春秋の飛来、越冬がある。カブトガニ等の希少な底生生物が多数生息。



写真の説明：候補地付近から大新田海岸を臨む



写真の説明：カブトガニの産卵

生物多様性の価値

価値（4）生態系サービスの提供の場であって、在来種を中心とした多様な動植物種からなる健全な生態系が存する場

【場の概況】

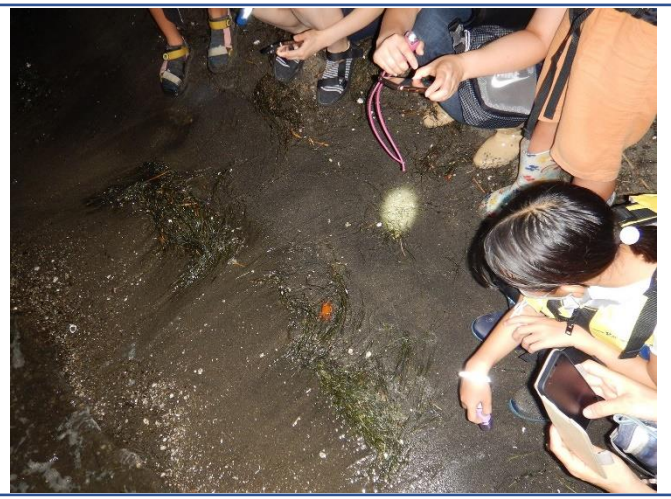
防災減災として砂浜が持つ波浪の緩衝機能を活かしながら、自然環境の保全も実現しているのが申請地である。セットバック護岸と呼ばれるインフラが設置されおり、Eco-DRRの先進地の一つとして環境省の2016年版の「自然と人がよりそって災害に対応するという考え方」にも紹介されている。景観・観光・教育として、アカテガニの産卵（放仔）観察会の開催がある。毎年夏の大潮に合わせて申請地で実施しているもので、毎回40～50名程度の参加がある。森と川と海をつなぐ生きものとしてのアカテガニを通して生態系のつながりの重要性を学ぶと同時にエンタテインメント的な機能もある。

【主な植生】

海岸湿地、干潟河口。シオクグ、アシ、オニシバ、ハマビワ、ハマエンドウ、ハリエンジュ、テリハノイバラ、マサキ、コマツヨイグサ、センダン、ハマボウ、ハマダイコン、ハマヒサカキ、ハマボッス、ハマヒルガオ、ハマゴウ、トベラなどが分布。

【確認された主な動植物など】

カブトガニ　など



写真の説明：アカテガニ観察会（2022年）

生物多様性の価値

価値（6）希少な動植物種が生息生育している場あるいは生息生育している可能性が高い場

【場の概況】

本サイトは、干潟、砂浜、河口、塩性湿地、陸地など多様な環境で構成されていることから、生物種も多様である。環境自体も比較的良好な状態で保たれており、希少性の高い生物群が生息している。単に多様度が高いだけでなく、希少種の個体数も他地域と比較して非常に多いことも特徴と言える。

【確認された希少種】

カブトガニ　環境省RDB：Ⅰ類 CR+EN 大分県指定野生動植物

シオマネキ　環境省RDB：Ⅱ（VU）　大分県指定野生動植物　など



写真の説明：カブトガニ幼生

生物多様性の価値

価値（7）分布が限定されている、特異な環境へ依存するなど、その生態に特殊性のある種が生息生育している場又は生息生育の可能性が高い場

【場の概況】

本サイトは、舞手川の河口域にあり、干潟、砂浜、塩性湿地、汽水域に適応した種が多数生息する。他地域ではほとんど見られなくなったような希少種が多数記録されている。塩性湿地の減少に伴って地盤高などの小さな違いによって生息地が限られるような巻き貝や甲殻類についても種数、個体数共に多い。

【確認された分布限定種、特異な環境へ依存する種】

分布限定種及び干潟、砂浜、塩性湿地という特異な環境に依存した種の生息生育が確認されている。

カブトガニ、シオマネキ　など



写真の説明：シオマネキ

生物多様性の価値

価値（8）越冬、休息、繁殖、採餌、移動（渡り）など、動物の生活史にとって重要な場

【場の概況】

例年、中津干潟では、国内有数のシギ・チドリ類が春秋に飛来、越冬している。また、ズグロカモメ、クロツラヘラサギ、ツクシガモなども多数冬に飛来する。近年、シギ・チドリ類は国内で2番目の数をカウントしている。本サイト付近でも、ハマシギ、トウネン、ダイゼン、チュウシャクシギなどが多数採餌のため訪れる。中津干潟は、モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査サイトに登録されている。

【対象となる動物種とその動物種の生活史の内容】

中津干潟では、シギ・チドリ類は、春秋の渡り時に飛来ししばらく滞在してから次の目的地に飛んでいく。ハマシギ、ダイゼンなどは多数が越冬する。春期には3,000～5,000羽が、冬期にも2,000～4,000羽がカウントされる本サイトは、その一部に過ぎないが、採餌行動なども見られ重要な場所となっている。

ハマシギ　（中津干潟全体での個体数：2000～4000）

ダイゼン　（中津干潟全体での個体数：200～400）

シロチドリ　（中津干潟全体での個体数：数十）

チュウシャクシギ　（中津干潟全体での個体数：100～200）

キアシシギ　（中津干潟全体での個体数：100～300）



写真の説明：トウネン



写真の説明：チュウシャクシギ（トレイルカメラ）

サイトの活動計画・モニタリング計画

活動計画の内容

中津干潟の一部となる本サイトは、基本的には良好な自然状態を維持している。所管する大分県中津土木事務所とは密に連絡を取っており、近年問題となっていた砂浜の退行については、ネット蛇籠による突堤の設置によって状況の改善が見られている。また、現在のところ大きな改変を伴う開発の情報はない。また、急激な植生などの変化等も見られない。よって海ごみなどの清掃作業の他、自然再生などの活動をする必要はあまりないと考える。ただ、状態の把握は常に必要であり、モニタリング及び、登録期間内に何度か生物調査を行う必要があると考える。

・年３回実施しているビーチクリーンに加え、年1回程度の塩性湿地のプラスチックゴミなどの清掃作業を実施する。

・登録期間である５年間に随時状況調査を行う。これは、水辺に遊ぶの通常業務の一つであり、毎年複数回中津干潟各所で実施している。

・海岸部の形状については、定点写真撮影などのモニタリングを行っておりこれを継続する。

・生物調査は、過去の調査記録のデータ更新を中心に実施する。

・期間中１回は申請地の生物群全体の悉皆的調査を実施する。

モニタリング計画の内容

【モニタリング対象】
ベントス、魚類、渡り鳥など。

【モニタリング場所】
中津干潟全域。本サイトは主に干潟、砂浜、塩性湿地部分を調査。

【モニタリング手法】
捕獲確認、目視確認、生息数カウント、写真撮影、トランセクトも検討。
渡り鳥は、環境省モニタリングサイト1000の手法で実施。

【モニタリングの実施時期及び頻度】
ベントス調査は1年を通じて随時行う。
渡り鳥調査は、年3回以上行う。
申請地については、5年に1度は悉皆的調査を実施する。

【モニタリング実施体制】
NPO法人水辺に遊ぶ会
NPO南港ウエットランドグループ
大分環境カウンセラー協会など